日本における S. Smiles『自助論』受容の思想史的研究（Ⅲ）

藤　原　　暹

承　前

本論考はⅠ，Ⅱを通じ『自助論』の翻訳過程を中心に原文意が明治初年の初訳段階からかなり遅れ，明治20～30年代における日本の産業革命の進行と新しい産業社会人の自立をまって受けとめられた事を指摘した。

しかし，一方で中村の初訳がこれまた重版を重ねて，今日までもその内容や表現が評価を受けているのである。

この時代を超えて存続し続けるものは何であろうか。

幸田露伴は早く，中村訳『西国立志編』について，

> 中村敬宇先生の尊仰せられたなどは，先生が漢学者としてだけでも既に立派な地歩を占めてゐられたためで……其の翻訳立志篇を通じて，攘夷的感情の懐抱者までをして西洋文明を窺知するに至らしめたものも実は，立志篇の文が漢学的に瑕疵無くて平明であったためである[1]。

と述べ，その漢学的教養の高さを評価している。言うまでもなく中村自身もともと漢学（儒学）者であり旧幕臣しかも昌平黌の教授として武士的立志に関与していた訳で当然漢学が名訳を支えるものであった事が考えられる。しかし『西国立志編』の「立志」はいわゆる幕末の武士的立志論，例えば橋本左内の『啓発録』などとは異っていた[2]。『西国立志編』は士族でなく平民（人民）の立志の書であり，庶民的立志論[3]であった。名訳たる所以は武士的漢学（儒教）そのものよりもむしろ庶民的日常生活に即した思想の上にあったと考えられる。『啓発録』は「去稚心」「振気」「立志」「勉学」「択交友」の各節をもっているが，こうした立志の要素が庶民の生活倫理として応変したものの上に名訳の因はあったのではないかと考えられるのである。

中村は初訳出版に際して「第一篇序」をのせ，そこで兵学書でなく，『自助論』を翻訳

---

1)「明治初期文学界」『露伴全集第十八巻』所収。

2) すでに拙論「S・スマイルス『セルフヘルプ』と独歩『非凡なる凡人』」『文芸研究 102集』東北大学，昭58，他にて指摘した。

3) ここで『庶民的』というのは，例えば田原嗣郎氏が『平田篤胤』（吉川弘文館，昭38）などで「庶民的生活理論」として被治者の立場における「安定的に生きる…課題」を中心におくという考え方に近い概念である。ただ本文中にも述べる如く，「庶民の生活安定への課題」に応えるに種々な立場があった訳である。

する理由を述べているが，その中心は，

西国の強きは，人民篤く天道を信ずるによる。……けだし国は人衆あい合うの称なり。故に人々の品行正しければすなわち風俗美なり。風俗美なればすなわち一国協和し，合して一体を成す。……天この民を生ず。人々同じく安楽を受け，同じく道徳を修め，同じく知識を崇うし，同じく芸業を勉むるを欲す。豈に此れ強にして彼れ弱，此れ優にして彼れ劣なるを欲せんや[4]。

という点にあった。

人民の自ら安楽の生活の向上を欲する心を起点に自立を考えているのである。

かかる庶民的自立の側に中村が立って訳述したとして，では如何なる用語を通してそれを表現していたのであろうか。

ちなみにかかる視点で翻訳をみると，原文で，

A) So fowell Buxton was always ready to acknowledge the powerfull influence excrcised upon the formation of his character in early life by the example of the Gurney family.[5]

とある部分を，中村は

わかき時，ガーニー家の儀範を観た時，みずから修むるの志気を発し，生平の品行を造り出せり[6]。

と訳している。

B) Choose to gaze, often upon a debased Specimen of humanity and to frequent his society, can not help gradually assimilating himself to that sort of model.[7]

を，

常に汚辱なき様式を見慣れ，下流なる人の集合に伍するものはおのづからそれと化して同気一体となることを免れざるべきなり。

と訳している[8]。

A) では「みずから修むるの志気を発し」と exercised を訳し，B) では assimilating himself を「おのづから化して同気一体となる」と訳している。この部分の原文を再訳した畔上は，

A) 早年の時，ガーネー家の感化が我が品性の上に大なりしを認めたり。彼はかく言ふ

---

4) 本稿は『西国立志編』の引用を主として，最新版　講談社学術文庫本を用いた。39-40頁，昭56。
5) 本稿は原文を1885年版から引用した。402頁。
6) 前掲本，479頁。
7) 前掲本，402頁。
8) 前掲本，478頁。なお，文中「下流の人」とは品性の劣る者の意。

を常としぬ「ガーネー家は我が生涯に色彩を与へたり」[9]

B）故に之と同一理にて，低劣なる人間を屢々見，其交際を屢々せば，自己も亦自ら低下して，低劣者と同一になるべし[10]。

と訳している。してみると中村訳の「志気」「同気一体」という気（Ki）の表現は庶民の実存[11]の起点として注意すべきもののように思われる。

1．『西国立志編』にみる気の用法

まず『西国立志編』から「気」及び「気」を含む用語を抜き出してみると104例ある。その中で使用頻度数の順にその7位まであげると次の如くである。

「蒸気」26例，「志気」15例，「勇気」12例，「気象」11例，「気」7例，「電気」5例，「才気」4例である。この中で「蒸気」と「電気」とはそれぞれ Steam と Electricity の訳語で自然科学技術用語であって明きらかに物質的内容を示している。これを除くと「気象」11例が問題になる。この11例を用文と共にあげると次の如くである[12]。

64	英雄の気象
119	（ピール）嶮を冒してあえてなすの気象あり
170	難に遇いて屈沮せざる気象あり
265	（ハンデル）何事にてもあえてなすところの気象あり
270	（衰え）の気象をなしたり
273	険を冒すの気象あり
298	英雄の気象あらしむる
302	丈夫の気象をあらしめし
444	自主の気象
531	英雄の気象
538	英雄俠然の気象をあらわし

今日「気象」とは大気中に生じる物理的変化や天気の状態（weather）を意味するが，上記用文中のそれは全て「気性」（きしょう，Temperament，charater）に該当する。「気」とは物理よりも心理を主として表現していると考えられる。しかし，いわゆる「気」の7例をみると5例までが air の訳語である。残りの2例は「95 気を失う」（dejected）「446 気をおとして答え」（reused）である。してみると，中村訳においては内面的な心理表現としてはいわゆる「気」の単独的な用法よりも熟語として用いられる傾向にあったことが考えられる。前述した「志気」の15例「勇気」の12例もかかる点と関係するであろう。

9）明治四十年　全四合本版，内外出版協会，595頁。
10）同上，594頁。
11）「気」の実存性については，例えば飯島宗亨氏「気分の実存的意義」『実存主義講座　Ⅳ』理想社，昭47，などがある。日本の「気」の概念には中井正一氏，赤塚行雄氏論考があるが本稿の対象している部門の記述はない。
12）表中数字は前掲本の頁数を示す。

では一番多い「志気」は何を意味していたであろうか。15例を用文と共に掲げると次の如くである。

130	（パーマーストンと）もっとも志気投合せり
171	沮喪せる志気を挽回すること
294	奮烈勇往の志気あること
304	志気勇剛
337	怠惰にして志気なき人
372	Ⓐ 志気昏弱にしてみずから助くることを知らず
416	Ⓑ 自主自立の志気によりて
433	剛毅の志気
434	志気を損敗するに至らんや
468	徳善の志気おのずから健康なるを得べし
475	高大の志気ある人
479	Ⓒ みずから修むるの志気を発し
487	志気をくじかずして… 後人の志気を惹き起こし
529	志気勇剛

上記文中ⒶⒷⒸは自助とか自立を直接に表現しているが，この部分の「志気」を原文と対比してみる。

Ⓐの原文は，

That there should be a class of men who live by their daily labor in every state is the ordinance of God, and doubtless is a wise and righteous one; but that this class should be otherwise than frugal, contented, intelligent, and happy, is not the design of Providence, but springs solely from the weakness, self-indulgence, and perverseness of man himself. The healthy spirit of self-help created amongst working people would more than any other measure serve to raise them as a class, and this, not by pulling down others, but by levelling them up to a higher and still advancing standard of religion, intelligence, and virtue. "All moral philosophy," says Montaigne, "is as applicable to a common and private life as to the most splendid. Every man carries the entire form of the human condition with him."[13]

で，これに対する中村の訳文は，

けだし人の毎日力作して衣食すべきは，上帝の律法にして，これに遵ふものはすなはち智者なり。また義人なり。皇天の命，はじめより工人の類を定めて倹節ならず，心聡明ならず，福祉あらざる一種の人と生じなせるにはあらず。特に人，志気昏弱にしてみずから助くることを知らず，私欲に徇い天命に乖戻し，智者義人たることあたわざるなり。ゆえに工人たる者，いやしくもみずから助くる健旺の精神を発せば必ずみずから樹立することを得べし。これ他人を仮すにより自己を立つるにあらず，実に人々同等の地

13）前掲本，325頁。

位に至るべく…云々[14]。

である。「志気」とは個人の Spring solely を意味し，healthy sprit (of Self-help) を示す。しかしそれは本来的に man に god が与えたものでなく，逆に人間は weakness, Self-indulgence, perverness であり，それを自ら主体的に抑制していく事が Sprit なのである。「志気」とはかかる状況を示している。またその働きは the ordinance of God による事でもあるとする。

次にⒷの原文は，

> Thus the best qulities of many minds, those which are evoked by vigorous effort and independent action, sleep a deep sleep, and are often never called to life, except by the rough awakening of sudden calamity or suffering, which, in such cases, comes as a blessing, if it serves to rouse up a courageous spirit that, but for it, would have slept on.[15]

であり，中村訳文は

> けだし人心の善徳は勇猛の工夫および自主自立の志気によりて惹き出さるることなるにかくの如く浮汎なる学問をなし，深睡の中に陥りては，もし幸いに患難災厄の幸福襲い来りて，その夢を破り剛勇の精神を呼び醒ますにあらざれば，永く警悟の期なく真正の活命ある人となることは得がたかるべし[16]。

である。ここでも主体的な Indipendent action は自ら内部に発する欲情(ここでは眠気)にうち克つ理性的活動を「志気」としている。

Ⓒはすでに序の部分で引用したバクストンがガーネー家の example によって自ら「志気」を発した記述である。ここでは，彼が気付いて example への方向化を成し，逆にそれによって自己を制禦している姿である。

いわば「志気」とは自然や人間の本源的なる「気」の多方向性に対し，その気を一定の（価値の）方向にし向け，し向けることによってそれを支えとして発奮する起爆剤的状況を指しているものと言える。

ところで「志気」という用語にかかる性格があるとして，「志」のつく他の用語は如何なるものであったであろうか。

2. 『西国立志編』にみる「志」の用法

「志」の字を有する熟語を『西国立志編』から抜き出し使用頻度数の順にそれを表示すると，

14）前掲本，371-372頁。
15）前掲本，357頁。
16）前掲本，416頁。

回数＼用語	心志	志意	志願	志句	志行	志望	志念	志業	宿志
計 90	47	10	8	7	5	4	3	大志等各２回	

となっている。「心志」という表現が47例あり，「志意」の10例を大きく超えている。しかも先述した「志気」の15例をも大きく超過している。この事は中村が同じ人間の内面的意志を表現するに当って「心志」という「心」という表現にかなり力点をおいていた事を物語るのである。

ここで，「心」を有する熟語表現を『西国立志編』から抜き出してみる。

回数＼用語	心思	心力	人心	良心	心術	心中	細心	専心	実心
計 85	25	16	11	10	7	5	4	4	3

「心思」が25例と最も多く用いられているが，「心志」の47例にはとても及ばない。「心力」の16例を合せてみても「心志」には及ばない。という事は中村が如何に「心志」という表現を好んで用いたかが分るとともに，先述した「志気」15例と組み合せると「心」⇄「志」⇄「気」という一連の思想構造をも予想させるのである。

ここで「心志」を特にくり返し用いる部分と「心思」をくり返し用いる部分を例示して原文と対照してみたい。

中村訳第八編第十一章は「心志あれば必ず便宜あり」であるが，ここに「心志」と「志」が多用されている。

「心志あれば必ず便宜あり」といえる古諺は確実なる語なり。人いやしくも一事をなさんと志を立つれば，すなわちその志，実に道路の障塞を登り越えて，功績を贏得することなり。またわれはこのことを做し得るものなり。またおよそこれを得んと志すところのものは，たいていおのずからその得らるるものなり。このゆえに，懇切に志を定むることは絶大の権力にして，これあればいかなることにしてもよくすべからざるものなし[17]。

これに相当する原文は

"Where there is a will there is a way," is an old and true saying. He who resolves upon doing a thing, by that very resoluton often scales the barriers to it, and secures its achievement. To think we are able, is almost to be so—to determine upon attainment is frequenty attainment itself. Thus, earnest resolution has often seemed to have about it almost a savor of omnipotence.[18]

である。「心志」とは will (willing) の訳語である。この「心志」以外に「志」がくり返

17) 前掲本，290-291頁。
18) 前掲本，258-259頁。

し用いられ，「志」をたてる事を前提として，事を成そうと心に決めれば（決心を固めれば）「おのずから得らるるもの」であると訳している。

また「心思」の多用される部分の中村訳は次の如くである。

ジェームス・ワットの勤勉，ならびにその心思を用いて習慣となれること

ワットは最も勉強労苦せる人と称すべし。その生平の行跡を観るときは，絶大のことを成し，絶高の功を収むるものは，天資，大気力あり大才思ある人にあらずして，絶大の勉強をもって，極細の工夫を下し，慣習経験によりて，技巧の知識を長ずる人にあることを知るべきなり。この時にあたり，ワットよりすぐれて知見の広き人はあまたありしかども，勉強を居恒の習いとして，およそその知るところのものを，有用の実物練習に運転することワットの如きものは，一人もなかりけり。なかんずくその心思，もっとも恒久忍耐にして，真証実験を求むることをもって努めとし，また常に勤めて心思を用うることを習い養えり。エッジワースの説に「人々才智の斉しからざるは，たいていは心思を用うることを幼時より習い養うと習い養わざるとに関係することなり」といえるは確論となすべし[19]。

この部分に相当する原文は，

Watt was one of the most industrious of men; and the story of his life proves, what all experience confirms, that it is not the man of the greatest natural vigor and capacity who achieves the highest results, but he who employs his powers with the greatest industry and the most carefully disciplined skill—the that comes by labor, application, and experience. Many men in his time knew far more than Watt, but none labored so assiduously as he did to turn all that he did know to useful practical purposes. He was, above all things, most persevering in the pursuit of facts. He cultivated carefully that habit of active attention on which all the higher working qualities of the mind mainly depend. Indeed., Mr. Edgeworth entertained the opinion, that the difference of intellect in men depends more upon the early cultivation of this *habit of attention*, than upon any great disparity between the powers of one individual and another[20].

である。「心思」とは「心思を用いて習慣となれること」と中村が見出しをつけているように，人の mind（心）が habit of active attention として「習い」の継続という経験的な状況を示している。従って，先に考えた「心志」が物事に志し，志すなら何事も成り得ないことはないという自然に内部に生じ「気」を一定方向に向け「志」していく起点を示すのに対して，「心思」は各人が自己自身を Cultivate Carefully していく状況を示しているものと考えられる。

中村はこうした一応の使い分けをした上で「心思」よりも「心志」を多用したものと考

19）前掲本，108-109頁。
20）前掲本，51頁。

えられるのである。

さらにこの「志気」や「心思」は,

人常に徳善の風気を呼吸するときは，徳善の志気おのずから健康なるを得べし[21]。

とか「風動感移」と表現される如く，人と人との内面的同一化に作用するものであった。

3. 日本版自助論にみる志の用法

中村訳『西国立志編』の刊行後，この書に影響されて日本版自助論が刊行された。その一つは于河岸貫一編『日本立志編』(明12初版) である。この書の刊行目的はその「緒言」に明確にあらわれている。

曩キニ敬宇中村翁が自助論即チ西国立志編ノ訳アリ，其書一タビ出ル，人争テ之ヲ購フ…スマイルス氏ノ著タル其帰旨ハ専ラ世道人心ニ影響シ有為ノ志気ヲ振ヒ自助ノ精神ヲシテ活瀝ナラシメントスルニ在リ[22]。

と，中村の訳が「世道人心ニ影響シ有為ノ志気ヲ振ヒ自助ノ精神ヲシテ活潑ナラシメントスル」自助にある点を受けとめ，それに対して自著は,

志厚ヲ以テ本旨トス…首トシテ孝子節婦志臣義僕若クハ明君賢臣哲人ノ事蹟ヲ（我古来ノ事蹟ヲ諸書中ヨリ抄録シ）載ス

ものであるとした。

かかる『日本立志編』であったがために，この書の第一巻の「節倹ノ部　節倹ヲ尚ブハ修斉治国ノ要務タルコトヲ叙ス」に続く第二巻は「養志ノ部　志ヲシテ恒ネニ存セシムルハ身ヲ立ツルノ基本ナルコトヲ叙ス」と「養志」と立身の関係の叙述に当てている。(なお，第三巻は「勤勉ノ部　人高遠ノ志アリト雖トモ勤強スルニ非ンバ事業ヲ成就ス可カラザルコトヲ叙ス」である。)

この「養志ノ部」における「志」の表現をとりあげてみることにする。第二巻全体は58丁あり，「志ス」という表現は全般的に多いが，「志」を含む熟語は少ない。次の如くである。

用語 / 回数	志気	初志	志操	篤志	志節	意志	大志	遠志	立志	志立
計 27	5	3	3	3	1	1	1	1	1	1

不撓ノ志2回，済世ノ志1，鑽堅ノ志1，苦学ノ志1，就産ノ志1，就業ノ志1

全体的に少ない用例であるが，その中では「志気」が5例で一番多い。参考までに「気」と「心」とをみると，これまた数は少い。「気」は「才気」が5回，「意気」「気力」「気象」「和気」「気力」「気節」が各1回である。

21) 前掲本，468頁。
22) 本稿は，岩手大学所蔵　明治16年六版本を使用した。

特に，「気象」は「独立自主ノ気象」という使い方で『西国立志編』と通ずる。「心」の方は「心情」「驕心」が各2回「心衷」「心酔」「心意」が各1回で「気」より少ない。

中村訳本と比較すると漢語の使用が全般的に少ないが，この理由は別に考えるとして，「志気」の使用の類似性から共通する部分の多い事が考えられる。内容的にも，例えば

凡ソ人ノ為スアル　必ズ先ズ之ヲ為スノ前ニ当テ，将サニ之ヲ為サントスルノ志アリ。…故ニ古来有為ノ士ハ必ズ少ニシテ高遠ノ志ヲ懐キ，終ニ常人ノ到ル能ハサルノ地位ニ達ス。然レバ則チ人間百ノ事業志ハ以テ基礎トセザルハ無シ，…本編ニ列叙スル所ノ者ハ則チ前哲先輩ノ志ヲ立テテ之ヲ保持セシ所ノ事蹟ニシテ人世事業，基礎ヲシテ牢固ナラシメザル可カラザルヲ証明スルニ足ル者タリ。

と述べ，事をなす前提としての「志気」の自発性を説き，人生事業の基礎を堅固ならしめる事を自立の起点においているのである。『日本立志編』が日本古来の事蹟から言辞を引用してきている事をも考え合せると，中村訳は新しくスマイルスの原著を訳すに当って考案した訳語概念（別稿[41]に述べた如く多分にそれは英華辞典に拠るものである）を有するものでありながら伝統的概念と重なり合うものであったことが考えられるのである。

さて，この伝統的な「志気」の用法は『日本立志編』につぐ日本版自立論『日本自助論』[23]では如何なる形で表われているであろうか。

この書は明治四十一年に出版されたが，その第一篇が「国民の自助」で第二篇は「進取の気象」となっている。第一篇冒頭は「独立自主の精神」となっており，日本の自主独立の精神が「我が国民の特長」（国民性）に起因することを述べ，

独立自主を全うせんと欲せば，無き所之を他に取らざるを得ず。是に於てか進取の気象生ず[24]。

と国民性の重要な要素として「進取の気象」をあげている。このことをうけて，第二篇で「進取の気象」の具体例を28節にわたって述べているのである。従って「気」の用法中，ここでは「気象」が多用されることが予想される。ちなみに調べると，「気」は次の如くである。

回数＼用語	気象	気	意気	勇気	気候	気力	士気	才気	気質	気節
計　64	11	10	8	5	5	4	3	3	3	2

花気，真気，鉄気，気宇，気色，寒気，察気，浮気，惰気，気の毒，各1回

これを「志」と比較してみる。

23）本稿は，岩手大学所蔵　明治41年本を使用した。
24）岩手大学所蔵　明治41年本。6頁。

回数＼用語	志	立志	同志	大志	宿志	志士
計 74	47	8	5	3	2	2

行志，志節，志学，志行志操，有志，心志各1回

やはり「気象」が多く，「志」の方は『日本立志編』と同じく「志」の用例が多く「志」を含む熟語は少ない。

では，ここでの「気象」は何を意味しているであろうか。

其の（日本の）国民的生活の一挙一動，万般の気象に於いて存在せる特別殊性の日本精神なるものの妙用なりと讃歎したるもの……実に国史は神代以来恒に生々活動を教へ，国民の気象は駸々乎として常に進んで止まざるを知るなり。

と「気象」を「日本精神の妙用」と把えている。しかも，この「精神」が開巻冒頭で，

独立自主は我が建国の大国是なり…我が健国の大国是たる独立自主の大精神を蔵せるなり[25]。

と書き出され古事記，日本書紀にみられる伊奘諾，伊奘冊二尊の国造り神話に「精神」の然るべき根拠が求められている。という事は同じく「精神」といっても「修理固成」つまり「(あしかび）のただよへる国土をつくりをさめかためなせ」[26]という天神の勅命のもつ生産の精神によって生じる「生々活動」の「妙用」が「気象」の因とされているのである。従ってかかる国土に生まれる国民は当然の如く，「今更論を要せざる」ものとして自ら負っている内面性が「気象」であった。いわば，「気」はかかる神の理念に包摂されて顕われた「象」であった。では「気象」よりもさらに多用される「志」とは如何なるものであったか。「志」が2頁に10回頻出する第四篇「立志勤勉」の冒頭の部分をとりあげてみる。

澤庵禅師曰く「再び此の日無し，寸陰は一尺の璧なり」

本居宣長の歌に曰く「為せば成る成さねば成らず成る業を成らじと捨つる人のはかなき」

貝原益軒曰く「志を立つるは大にして高きを欲す。小にして低きを欲せず。小にして低ければ，小成に安んじ，大にして高ければ大成を期す。凡そ事は上を学んで中に至り，中を学んで下に至るものなり。故に天下一等の人たるを志すべし」。

一，立志勤勉は人間の道なり

二宮尊徳曰く「人道は自然に放任すれば塞がる。日々夜々人力を尽し保護して成る。」と，凡そ善事は成さんと欲せずして自ら成ることなく勤めずして自ら到ることなし。則ち人の此の世に処する成さんと欲して志を立て到るを期して努めざる可からざるなり。

25）本稿は，岩手大学所蔵　明治41年本を使用した。97頁。
26）岩手大学所蔵　明治41年本。1頁。

志を立つるに法あり，先づ其の目標を一定せざる可からず…志を立つるに高大なるを要すること前にも引きたり…志を立つるもこれを持せざれば成らず。志を立つることむしろ難からず，志を持すること真に難し。志を持するとは何ぞや。勤勉是れなり。勤勉の術は如何。造次顚沛も油断なく常に省察注意するを要とす[27]。

ここでは，まず宣長の「成せば為る」の歌や益軒の「高きを志す」という言辞を引き，更に尊徳の「人道は自然に放任すれば塞がる」と自然を抑制した意志を述べる。しかしそうした意志を有することだけでは事は成らず，常に志を保持し持続する内発力を起すことを説いている。いわば「志」とはかかる精神の持続の過程そのものであったと言えよう。

「志す」という言葉がこの書でくり返し用いられるのは，こうした継続を喚起して止まない心理的効果にその因があったと考えられる。

この事は前述した「気象」が理念に包まれている「気」とという性格とも連関する。「気象」とは「進取の気象」と言われる如く，常に求めて止まない行為自体であり，それは気の自然発生的な力に支えられねがらも，なおそれを抑制していく相互の補強的活動を意味していたものであった。『日本自助論』と『西国立志編』は勿論異る側面も多く発見できるが，以上の如き「気」「志」にかかわる思想は同じものがあった。

以上の如く，明治における自立論に貫流しているものは思想史的には如何なる意味をもっていたであろうか。

4. 幕末庶民的立志論と「自助論」

「立志」という用語は明治における「立志社」といった政治的結社の名や個人の「立身出世」の風潮によって広がったものではない。江戸時代を通し広く用いられたものである。その中で庶民的自己形成論とは，例えば，

元禄，享保期に三都とその周辺にはじまり，近世後期にほぼ全国的な規模で展開し，明治二十年代以降に最底辺の民衆までまきこんだ……石田梅岩と心学，二宮尊徳と報徳社，大原幽学，中村直三のようなたくさんの老農，後期国学，黒住，金光，天理，不二，丸山教などの民衆的諸宗教……などそれであり……[28]。

と指摘される江戸後期の農村（民）生活思想に代表されるものである。

では，これらにおいて心⇄志⇄気の関係は如何になっているか考えてみたい。

長野義言[29]は，例えば立身を次のように述べている。

27）本稿は，岩手大学所蔵　明治41年本を使用した。231-233頁。

28）「庶民的自己形成」論という概念は，例えば，安丸良夫著『日本の近代化と民衆思想』青木書店　1974で，従来の日本思想史研究が「世俗的な道徳形態の内面にこめられている広汎な民衆の自己形成・自己鍛練の具体的過程を把握していないように思う」としているものに近い。しかし本文中にもふれる如く，本稿はその実態よりも思想構造を問題にした。引用は 10-11頁。

29）後期国学運動の一人で，「ひとり世をも教へ，名をもあらはし，家を出ずして人をも道びく。

人一身のうへにても，いかなることをもせんと思ひてつとむるほどに自然其妙にいたる。是人力のみならず，いはゆる神の道のままにして天地の間の道理也，今，皇国に行うべき道の貞を物にたとへて申さんに，人体を国とし，心を国君とし，気を臣とすれば，魂は神霊也。心は気凝の義にて神徳によりてなれる気の霊也。心よく気をつかふ時は，気よく心に従ふが故に万の悪には放る也。凡世間にある人のうへを察るに，心には悪しと知りながら，気の私欲を制することあたはず，つひに気の欲するにひかれて心の義をもおかすこと多し。さるは心にしるは魂の教へなる事を思はず，剰神を捨て，臣下の私による物にて，災ひ其身に及ぶべき也。凡気中にも段々ありて，心の方に近きは貴くよろしき方多きを，心に多きはいやしくて悪しき方多し。国君の臣の中にも貴賤の次第あるが如し。されば心の尊主も，私にして尊きにあらず，その思慮も私にてあるにあらず。みな霊魂の依さしなる事を知らば，気の欲するにひかる事はよもあらじ[30]。

と述べている。「人一身のうへ」において，物を成さんと勤むると「自然に其妙に至る」が，それには「気凝（けこり）」たる「心」・「神徳によりてなれる気の霊」によりてなる事を知らねばならないという。かかる「心」を自覚すれば，「気よく心に従う故に」事は成就する。つまり「気の私欲を制する事」が前提であると考えた。また鈴木朖は，

「志アルモノハ事ツヒニ成ル」と云語アリ。志ナキ者ノ事ノ成リタルタメシナシ。志ダニアレバ精力モ其方ニハオノズカラ強クナリ，師，友，書籍モオノズカラ好ム所ニハ集ルモノナリ。…其志深キ時ハ，其至ル所モ深ク大ナルトキハ其成ス所モ又大ナルベシ。サレド小ク志シテ小ク成ルモ，聊モ志ノナクテ一ツモ成ル事ノナキヨリハ猶マサリヌベキ也。人ノ資質ニ大小アリ，成ル所ニ大小アリテ世中ノ大小ノ用ヲ済事コレ造化ノ神霊，産霊ノ大神ノ御神徳ノ妙安排也[31]。

と述べる。「志ノアルモノハツヒニ成ル」もので「志」さえあれば「精力」も自然にその方にし向けられると言う。人々皆「高キ志」を抱くべきであるが，その世中に果す(成す)「用」の大小は「造化の神霊，産霊ノ大神ノ御神徳ノ妙」によるとする。ここに心気は自然の気が抑制され，神慮の内に句含（摂）されているのである。ここから「身をたてんとする人は勤労（カセギ）つとむるよりも人の心を得るにあり。人の心を得るには誠につくすにしくはなし」と「心の誠」（神慮への接近）が求められる。しかし，単なる精神主義ではなく「誠を竭すとは，心の真実をのみいふにあらず……工匠は物をかたくつくり，商人は直を廉く売るたぐひみな世人と誠にをつくすなり」と生活する自己自身を「労する」ことをもって

かかる功はおのがどちこそ　さるいとまも多ければつとめなすべきことなる」という立身の学を志している。

30）『沢廼根世利』芳賀登・松本三之介編『国学運動の思想』岩波書店，1971所収本，409-412頁。

31）同上　所収『離屋学訓』383-384頁。

「誠」としたのである。橘守部はまた

心ざしあらん人はわが精神を琢磨べきは，もとよりの事にて，われに従ふ家来・奴隷にいたるまでも物の思慮，心の智慧を発生やうにすべきわざなり。そは事に臨り物に触れたる時，まづわが考の極りを定めおきて然而ものどもにも各自かうがえさせてその善を誉め，またしきをもそれぞれに理をそへて物に励むやうにするぞよき。常に度々然為れば自も他も甚く智のまさりゆくのみならずおのづからに身も修り，家の産業などもはげむやうになりゆくなり[32]。

と述べ，自分も他人も「おのづから…まさりゆく」道を求めるべき「志」であるとする。こうした「心ざしあらん人」の態度はやがて互に人と人との相応ずる世界を志向させる。

宮負定雄は，

人は常に何事も天地の鬼神に質して，聊も愧る事なきやうに心を清く正しくして善悪ともに吾等の所行をば，目に見えぬ幽冥の鬼神は慥に見聞し見徹し，聞徹しなる事を覚悟して，身を慎み，身分に応じて世の為人の為にそれぞれの功を立て，老子が語に「勿レ謂二闇昧一，神視二我形一。勿レ謂二小語一，鬼聞二我声一。故天不レ欺レ人，示レ人以レ影。地不レ欺レ人，示レ人以レ響。人生二天地一，気中一，動作喘息，皆応二於天一。為レ善為レ悪，天皆監レ之」と説きたる言を心に思ひ身に守りて神の御心に乖かぬまでの事なり[33]。

と述べ，天（神）の声が人にそれぞれの響をもって伝わり，人々が各自の功を立てるを支えているとする。さらに老子の語を引き，そうした天と人との感応は天地の気中に生じた人間の「動作喘息」が皆天（神）に対応しているからであるとする。こうした感応の響は大原幽学においてはもっと強く表現される。

俗を導も拍子と響に乗って，以て能気に入る事肝要なるべし。終日私慾私愛に気をとられ，ものを言い出す言葉の下から気の替る風情の愚俗といへども，こまの蹄の響きに気を得て乗るが如く，或は身に気勢の混じたる如く，信を尽す事の身体に極りたる友を得て育ふにおゐては導き得ずという事なし。…駒に乗るだにも蹄の響に心無き族は，生涯馬に乗る事得ず。況や人を導くに，互に移り合ふ其響を執る事を知らずして何ぞ至らむ[34]。

と「互に移り合う」響の世界を自立の要件としているのである。ここでもその「響」が「気を得る」事に関係しているのであるが，かかる「気」はいわゆる「気」の私のままではなく，私の気を他に転換させた意識上の他者との一体化の世界であった。こうした世界を得る（自立する）ためには常に「気」を配り，注意していく必要があった。二宮尊徳は

32）同上　所収『待問離記』56頁。
33）同上　所収『国益本論』307-308頁。
34）『微味幽玄考』奈良本辰也・中井信彦編『二宮尊徳，大原幽学』岩波書店1973所収本，269頁。

「立志」について,

百事決定と注意を肝要とす…何事によらず百事決定と注意によりて事は成るなり[35]。

と説いている。またこうした「人道」を,

人道は日々夜々人力を尽し保護して成る。故に天道の自然に任すれば忽ちに廃れ行はれず。故に人道は情欲の儘にする時は立たざるなり[36]。(また「百事自然に任すれば皆廃る」[37]とも言う。)

とする。「生気あるものは皆発生せしむ」[38]るのが「自然」であるがために,逆にそうした自然(人間の根源的欲求も)「欲を押へ情を制し勤め勤て成る(す)」[39]べき事であるとしたのである。またこうした道は「只一筋」と考へられ,「神といひ,儒と云仏といふ皆同じく大道に入る入口の名なり」[40]とされた。

以上の如き幕末庶民的立志論と中村『西国立志編』以下のそれを比較すると,連続面と相違面が存在するように考えられる。

人の内面に生ずる「気」を一定の方向に自らさし向け,「志気」を保持して理念を達成せんと勤め,又他をも同化して精神共同体形成に参加していくという点は同じである。すでに別稿で述べた所であるが,中村訳には自助の精神が「夫れ感化の速かなる事影響の如し」[41]と,「感化」「影響」により形成されることを強調する。ここでの「影響」は「影」と「響」という用法でこれは幕末立志論に出てきた用法と同じであるが,「感化」は新しく華英辞典から引用した influence の訳語である。伝統的な用語では説明し得ないものを含んでいたものと考えられる。

思想史上の異りの一つは「化」にあったのではあるまいか。

長野義言の「心は気凝(ケコロ)の義にて…心よく気(ケ)をつかふ時は気よく心に従ふ」という気は Ke である。この「気凝(ケコロ)」は「神徳のよりてなれる気の霊」とされ,鈴木重胤によると「造化(むすひ)」[42]となる。宮内嘉良は「産霊の霊(ヒ)火」として「天地月万物,都て火が大元なる事」といい,「御心に化(ナ)り変る」[43]火の働を説く。

「造化」「産霊」の成立は気の化したものという考えが在り(ここでは「キとケと通う」[44]という Ki と Ke の未分化の状況もある),人はその「神代の実理(コトワリ)」を心として自立する

35) 同上 所収本『二宮翁夜話』132頁。
36) 同上 所収本,124頁。
37) 同上 所収本,208頁。
38) 同上 所収本,123頁。
39) 同上 所収本,124頁。
40) 同上 所収本,125頁。
41) 拙論「『自助論』にみる感化の思想」『文芸研究 106』昭59.9 予定。
42) 前掲『国学運動の思想』所収『世継草』234頁。
43) 同上 所収『遠山毘古』320頁。
44) 同上 所収『遠山毘古』321頁。

のであるとした。その際宮内は「実理」の根拠を産霊＝神の言辞に求め，「皇神の教道言霊の妙用は厳密なるもの」[45]と「凡物みな火を含むこと此言霊の妙用」[46]と言葉の神秘性（Ke）を志向していった。

これに対して中村訳は，

よき表様を立つる人は，これと親炙し付近するものをして，みずから習慣してこれと共に化せしむるなり。されば常言に「わが言うごとくになすべし，わがなすごとくになすことなかれ」といえるは正道に反して行わるべからざることなり。…真実に観覧して証知することは特に読み聞くものに比すれば，その心に覚感することはるかに深しとす[47]。

と述べ，言辞そのものによる「覚感」よりも人間の行動，習慣による「化」を重視した。勿論「言行儀範，実にわれらを感化鎔鋳する」[48]と言うように言葉の「感化」も述べているが，「父母毎日児子の眼前に在りて行うところのもの，その児子を風動感移することはななはだ大いなれば」[49]という行動の「風動感移」に力点を有していた。これが中村の記述のもつ「感化」である。しかるに幕末立志論の言霊の化に通ずる覚感はロゴスとしての理とその背後にある神秘にまず真実を求め，それから現実の人間行動を規定していくものであった。中村訳のもつ世界はかくの如き経験科学的な思考に満され，言葉（ロゴス）もかかる経験により確然と定められたものであったのである。従って，「志気」という場合，「気」は Ki として Ke より独立分離しており，神秘的迷信的なものは排除されていった。

しかし，「Ki」の関与していた「魂気は永く産須那神の左右にありて，その子孫を擁護す」[50]といった生々主義は残っていくものと考えられる。六人部是香は，

人を始め，彼五穀等の諸品に至るまで，種蒔，培養の所為こそ，人の動作の上に成れ，其物どもの生々化育するは悉く幽政に関係れる事…[51]

と述べ，人間の行動を「生々化育」の活動とし，そうした行為そのものに「人間の顕世に存在する」意味を求めた。これは中村訳『西国立志編』にも受けつがれていく。ちなみに，この書に序を寄せた三田葆光[52]は，

いでや此の書世に行わわれていて，こを読みみん人々，その道々につきて，おのがじ

45）同上　所収『遠山毘古』329頁。
46）同上　所収『遠山毘古』342頁。
47）前掲『西国立志編』464頁。
48）前掲『西国立志編』470頁。
49）前掲『西国立志編』468頁。
50）前掲『国学運動の思想』所収『産須邦社古伝抄』222頁。
51）同上　225頁。
52）サンダカネミツ　文政８―明治40，旧幕臣，後お茶の水女子高等学校教師黒川真頼に師事す国学者。

し健く雄々しき志をたて，事にあたりてたゆまずくずおれず，万の事業一つの真心もて，なしおおすべき日本魂，ふるいおこさんたよりともなりなましかば，大人のいたつきむなしからず，いみじき世のおしえぐさともなりなまし。おおよそ天地の間に人とあらんかぎりたとい国をへだて境をことにし，打ち見るすがたうち聞く詞は，さまざまなりとも，ひとしくひみな産霊の神の御霊によりて，生まれつるものにしあわれば，おのずから直く正しき真の道はひとすじならであるべしやは[53]。

と述べ，この書が日本人に「雄々しき志」をたてさせる契機になると共に，それは産霊の生み出す力によるものであるとしている。

こうした幕末立志論にみられる生々主義が『西国立志編』を経て強調されたのが，『日本自助論』であった。ここでは，『西国立志編』にモデルを借りながら日本国民の自助を説いていったが，原文のもつ冒頭のミルやディスレイリの個人の政治的な自立に代って，伊弉諾，伊弉冊二尊の「修理固成」と尊徳の開田の言葉を提げ，生々（生産）主義を標榜した。（この書に圧倒的に多くの二宮尊徳の言葉を引用したのも，この理由によるであろう。）

かかる生々主義が外来思想の翻訳としての『西国立志編』やその翻案を支え，時代を超えて受けとめさせた因と考えられるのである。

ではこの伝統的生活主義（Life-Centeredness）[54] 自体はどんな特色を有したであろうか。

5. 伝統的生活主義と自立

本稿の〔I〕でS・スマイルスの原文にみられる Life は『西国立志編』ではほとんど「生活」とは訳されていなかった。これが原文の再訳（例えば畔上賢造訳）をまって「生活」と訳出されたと指摘した。（『西国立志編』では「衣食住」「生平」とか訳し，「生活」は「なりはひ」と訓んでいる）ここに原文意のもつ産業革命期の新しい産業人の生活主義への覚醒の状況をみてとったのである。ところが一方，これとは異る伝統的生活主義の継続がほぼ時を同じくしてみられてくる。

この新しいものを，都市型人間の生活的自立と把え，後者を農村型人間の生活的自立と解することもできるであろう。しかしこの後者は新しい産業社会の生活と対決し，それを否定するよりもむしろ伝統を時代に合せていった。『日本自助論』で，

英人アーサー・デオシーが嘗て日本魂を論ぜる中に，我が国民がバーサチリチー（変通自在）を決して軽躁浮薄なる模倣附和にあらず。其の国民的生活の一挙一動，万般の気象に於て存在せる，特別殊性の日本精神なるものの妙用なりと讃嘆したるもの亦知己

53）前掲『西国立志編』42頁。
54）石田一良著『カミと日本文化』，ぺりかん社，昭58。

の言と称すべく…恒に生々活動を数え国民の気象駸々乎として常に進んで止まざるを知るなり[55]。

と国民の Versatility 自体を確認した事がそれを如実に物語っている。更にそういう変通性を支えるものとして日本人の「気象」を本来的なものと把えたのである。

つまり，伝統的生々主義自体の中にあるものの新しい確認によって自らの新しい自立の根拠としていくものであった。これはいわば，生々主義の起点である「気」の自覚によって「立志」が成り立っていた事とも関連するのである。

次にかかる自立ゆえに庶民の自己形成には特別殊性が考えられるのである。

安丸氏は近代民衆の自己鍛練はそうした「生活規律を自覚的に身につけることによってのみ，人々は没落（ルン・プロ化）の危機から這いだせるのである」[56]という。たしかに常に「志しつづける」事の自立は生活自体が常におびやかされる危険や不安から脱する唯一つの途であったと考えられる。と共に，庶民の「立身」には別の性格を与える。その一つは，例えば尊徳が言う次の如き立身である。

此道を学ぶとも，此道を以て世に用ひられ，立身せんと思ふことなかれ，世に用ひられん事を願ひ立身出世を願ふ時は本意に違ひ本体を失ふに至り(る)[57]

ここで「此道」とは例えば「物を売らんと欲る」世俗的欲求である。かかる世俗的欲求から離反する自立である。いわゆる「立身出世」とは異るものである。これは『西国立志編』においても「人あるいは功なくして敗るるものあり，しかれども善事を企てて成らざる者は善人たることを失わず，ゆえに敗るるといえども貴ぶべしその跡の成敗のみを観るべからず」[58]と述べられていて相通ずる内容をもっている。してみればかかる「立身」こそ庶民の本来的な自己形成であったと考えられる。

通常，『西国立志編』は「立身出世主義の人生読本」であったとのみ評される[59]。たしかにそのように受けとめた時期も人々も居た。しかし，『西国立志編』自体もそれを受けとめ続けてきた庶民も実は反立身出世主義の系譜の上にあったのである。（独歩「非凡なる凡人」もかかる流れの中で位置づけられるべきであろう。）[60]

そしてこうした庶民の意識こそ，尊徳の言う「神儒仏の教えも其実衣食住の三つの事のみ」[61]というロゴスとしての思想の生活への応変（理の気への，気の理への同化）でもあったのである。

55）前掲『日本自助論』97頁。
56）前掲，注28）『日本の近代化を民衆思想』23頁。
57）前掲『二宮翁夜話』170頁。
58）前掲『西国立志編』49頁。
59）例えば，成瀬正勝著『明治の時代』請談社，昭42，70頁。
60）拙論「S. スマイルス『セルフヘルプ』と独歩「非凡なる凡人」」，『文芸研究 102』昭58。
61）前掲『二宮翁夜話』186頁。